

北海道／北方世界 Hokkaido/Northern Peoples

蓑島栄紀 ひでき

キーワード…アイヌ、北方ユーラシア、北アメリカ、先住民族、口承文芸、交流、交易、商品経済、自然との共生、ポストコロニアリズム

はじめに

「日本研究の必読書」という全体テーマのもとに、「北海道／北方世界」という課題を与えられたからには、あくまでも日本の歴史・文化を主体とする立場から、それとのかかわりにおいて、北海道や北方世界について論じるべきかもしれない。

北方文化研究の巨大な先達の一人である大林太良たひらは、その主要な論点を簡潔にまとめた短文のなかで、「北方文化」の内容はきわめて多彩であると断りつつも、一般に、「日本列島の北方に位置する地域で展開した文化」をまとめて「北方文化」と呼ぶとしている¹⁾。

このように、北海道／北方世界について考える際、意識的と無意識

的とにかかわらず、日本に軸足を置くのが前提とされることは、珍しいことではない。

しかしながら、言うまでもなく、アイヌ民族をはじめとする北海道／北方世界の諸民族・諸文化は、日本との関係においてのみ存立していたわけではない。彼らは、独自の文化と歴史を有する主体であり、北方ユーラシアや、場合によっては北米方面など、さらに北の広大な世界とのかかわりを有していた。

また近年、こうした北海道／北方世界の「独自性」は、南方の琉球などとともに、しばしば自明のものとされがちな「日本」を相対化するという文脈において注目されることが多い。むろん、そのことの意味は重要である。しかし、当然ながら、北海道／北方世界の文化は、「日本」を相対化するために存在しているわけではない。

「日本」を相対化するものとしての北海道／北方世界への関心は、逆説的に、「日本」を中心とする磁場にとらわれた言説であるともいえる。

北海道／北方世界では、あまたの諸文化が、それぞれの地域の自然環境や基層文化・伝統文化に根差し、広汎な交流のなかで、隣接諸地域の多様な文化要素を取捨選択しながら、独自の文化と歴史を展開させてきた。そうしたありようそのものを、北海道／北方世界（アイヌ民族など）を主体・主語として、正面から描きだすことが必要であろう。

上記と関連して、現代社会におけるアイヌや北方の諸民族の政治的な地位としては、国際的に認められた「先住民族」であるという側面を忘れてはならない。二〇〇七年に、先住民族の権利に関する国連宣言が採択されたことにもみるように、国際的な情勢にも後押しされて、アイヌ民族を取り巻く状況も変化している。北海道／北方世界の歴史・文化の研究は、現実世界の動向と密接にかかわりつつ、新たな局面を迎えているのである。

一 大林太良の北方文化研究

北海道、アイヌおよび北方世界の文化の諸相について、数多くの

民族誌を渉猟し、比較検討して、それらの起源や成立・展開の問題を多角的に論じた大林太良『北方の民族と文化』（山川出版社、一九九二）は、その視野の広大さ、スケールの雄大さとあいまって、現在もこの分野の研究において、容易に越え難い高峰としてそびえている。

ひと口に「北方文化」といっても、生態学的な条件の面でも、民族・語族の分布の面でも、その内容はきわめて多様であるが、そこには一定の共通する特徴が認められることも確かである。大林は、北方諸民族の生活様式が、共通性と地域差の両面をもつことを、生業・社会・宗教などの諸側面から具体的に指摘する。例えば、北方の諸文化をつらぬく要素として、「寒地適応の生活様式」があり、そのことは、住居や衣服などの特徴や、採集狩猟漁撈の経済が長く続いたことなどにも表れている。また、北方諸民族の多くに共通する観念として、「動物と人間との密接なかわり」「動物の再生（循環）」の思想が注目される。こうした世界観は、「シヤマニズム」や「クマ祭（クマ送り）」、動物の「主」という観念などの諸問題と深く結びついており、それらに関連・類似する習俗や信仰・儀礼は、多かれ少なかれアイヌ文化にもうかがうことができる。

さらに大林は、「アイヌ文化の北方的要素」について、アイヌの家屋や、木製儀礼具の「イナウ」、方位観、「ユーカラ」（後述のユカラ）などの具体例にそって、巨視的かつ微細に諸民族の事例と比

較検討する。それによって、アイヌ文化と、ロシア極東・シベリアの諸文化や、アラスカ・北米北西海岸の諸文化との類似性、共通性、ときには重要な相違点が、つぶさに明らかにされる。またアイヌ文化には、こうした北方狩猟民文化の要素だけでなく、内陸アジア的な遊牧民文化の諸要素が認められることや、南の日本文化との関連を軽視できないことも指摘される。

そして、北方ユーラシア、内陸アジアの遊牧民文化は、アイヌ文化に影響を与えているだけでなく、日本文化の根幹にも多大な影響を与えているとされる。同様の着眼は、デュメジルに触発された吉田敦彦の神話研究などにもみられるが、² 支配層の文化だけでなく、庶民の家族慣習などにも、内陸アジアの文化との結びつきは随所に確認されるといふ。こうした、「日本文化のなかの北方的要素」への注目も、大林の重要な関心の一つであった。

以上のように、大林の研究において北方文化は、人類文化の巨大な水脈の一つとして、きわめて重視されていた。また、アイヌ文化の起源や展開へも大きな関心が注がれたが、こうした大林における北方文化への興味の前提に、世界のなかの日本文化の位置づけを解明するための重要なカギとしての注目が、否みがたく存在していたことも事実といえよう。

二 南北との交流——考古学と歴史学

北海道やアイヌの文化のなかに北方系・大陸系の要素がみられることは、考古学研究においても早くから指摘されてきた。

このテーマに冷戦時代から取り組み、先鞭をつけてきた研究者の著作として、ここでは菊池俊彦『オホーツクの古代史』（平凡社新書二〇〇九）をあげておきたい。菊池の研究は、前近代の列島北部・北海道とそれ以北の北東アジア地域との交流についての、実証的・本格的な歴史学・考古学研究の先駆といえる取り組みである。本書では、長年にわたる菊池の研究のエッセンスが、一般向けの平易な語り口でまとめられており、取り扱われている話題の範囲も幅広い。³ 例えば、唐代の文献史料に登場する北方の「流鬼」の実像と、考古学上のオホーツク文化（五く九世紀頃）との関係、また大陸の「鞞^{かっ}」（女真の祖先集団）との交流や、さらにその北に位置する諸文化とのつながりにまで視線は広がる。すでに唐代に、北極圏からセイウチの牙製品を入手する超遠距離交易のネットワークが実在したとする指摘はとりわけ興味深い。このように菊池は、日本列島の北方に広がる広大な地域の文化交流について、遺跡や遺物と、文献史料の記述とを仔細に検討したうえで、「環オホーツク海域」という地域圏・歴史空間の存在を提起するのである。

菊池の研究にも顕著なように、前近代の北海道・北方世界においては、文献史料が零細であるという弱点があるため、考古学研究の成果が歴史研究に与える影響は大きい。例えば、中世史や近世史の分野では、一九八〇〜九〇年代以後、北海道の上ノ国町勝山館、青森県津軽半島西岸の十三湊、岩手県平泉の柳之御所などの考古学的調査が進んだことをうけて、交易・交流をキーワードとする北方史研究が活況を呈するようになった。

こうした研究動向は古代史にも波及し、とくに一九九〇年代に着手された鈴木靖民の研究を嚆矢として進展した。鈴木によるこの分野の業績は、鈴木靖民『日本古代の周縁史——エミシ・コシとアマミ・ハヤト』（岩波書店、二〇一四）にまとめられている。文献史学・考古学双方の視点と成果とを積極的にすり合わせる研究手法は、北海道や東北地方の考古学研究にも刺激を与え、その後の北方史研究の枠組みに大きな影響を及ぼした。とりわけ本書所収の「古代蝦夷の世界と交流」（初出一九九六）は、いまでも示唆と含蓄に富む雄編である。ここでは古代北海道の位置づけについて、周辺諸地域との多元的・複線的な交流の集散地としての性格が指摘され、「東アジア文明の十字路」という、きわめて刺激的な評価が与えられている。すなわち、北方史・アイヌ史は、その地域・民族に根差した歴史であるとともに、そうした枠組みに収まらない、広域史における要衝としての役割を果たす場面があつたのである。また、北方史・ア

イヌ史を考える際に有効な広域的歴史空間が、はたして「東アジア」なのか、それとも近年、「東アジア」概念への批判のうえに提起される「東部ユーラシア」なのか、はたまた「北東アジア」のよくな別の地域圏なのかといった点も、現在の北方史研究において重要な論点の一つだといえる。⁴⁾

ところで、最近の考古学研究では、北方ユーラシア大陸と列島北方社会とのあいだの実証的な比較研究が進むなかで、少なくとも物質文化の面では、大陸と列島北部とを結ぶ「北周り」交流の意義は、一時期注目を集めていたほどには強調できないという見解が提示されている。⁵⁾ また、早くから文化人類学研究で指摘される日本列島とカムチャツカとベーリング海峡・アリューシャン列島を経てアラスカ・北米北西海岸に至る「環北太平洋」の文化圏は、歴史学研究の手法では実証することが難しい。

後述する瀬川拓郎の最近の研究に関しても、信仰・儀礼や世界観を含むアイヌ文化の基層について、どちらかというと「縄文的」なもの、さらには、倭・日本からの影響を見出そうとする傾向が強くあらわれており、ここでは、大陸方面との「北周り」のつながりは、やや後景に退いている。⁶⁾ このように、前近代の北海道・アイヌと「北方世界」との結びつきについて、近年の考古学研究はいささか懐疑的である。

とはいうものの、前近代の北海道と、北方ユーラシア大陸など北

方世界との連関を、インギユラーな要素として退けてしまつてよいかといえ、それは早計である。北海道に対して、いくたびか北方からのヒトや文化の伝播・渡来の波があつた事実は否定できない。⁷⁾このような波は、旧石器時代や縄文時代において複数回存在したことが指摘されているし、その後も、例えば七〜八世紀前後には、オホーツク文化の存在によつて、大陸と北海道との関係が強まつた。また、十三世紀末〜十四世紀初頭におけるモンゴル帝国(元)とアイヌの紛争も、この地域のヒト・モノ・文化をかき混ぜる大きな要因となつたであろう。さらに、明・清もアムール川下流域やサハリン方面に手を伸ばし、その影響のもとで、アイヌやその近隣の諸民族のあいだには、きわめて濃密な文化交流が繰り広げられた。

こうした論点と関連して、アイヌの英雄詞曲(ユカラなど)の起源をめぐる問題に触れておきたい。かつて知里真志保は、アイヌ文化の前身である擦文文化(七〜十三世紀頃)の人々と、オホーツク文化人との長期間にわたる抗争の記憶からユカラが発生したとする雄大な説を提唱した。⁸⁾その後、この学説は、榎森進など一部の研究者に受け継がれているものの、批判も多い。この問題に関しては、大林の指摘するように、北方ユーラシア、内陸アジアに、アイヌのものと同類する叙事詩が分布していることも軽視できない。ユカラの源流は、物語のモチーフがどのように生まれたかという議論だけでなく、叙事詩の形式自体が、北方ユーラシアとの接触・交流に

よつて伝播したという可能性について考慮してみるべきだろう。⁹⁾先述のモンゴル帝国との争いを例にあげるまでもなく、アイヌがそうした北方ユーラシア、内陸アジアの口承文芸の伝統に接する機会は何度もありえたはずである。

以上をまとめると、北海道やアイヌと、それ以北の広大な北方世界とのつながりについては、かつての文化人類学研究などに顕著なマクロな視点と、最近の考古学研究などの細かな議論とのあいだで、その評価に温度差があるといえよう。これらを解きほぐし、あるいはすり合わせていくのは容易ではないが、実証的で緻密な研究の継続と同時に、かつて大林の研究が有したような、巨視的なスケールによる研究姿勢が必要であることは間違いなからう。

三 「自然と共生する人々」

知里幸恵編訳『アイヌ神謡集』(郷土研究社、一九二三)岩波文庫、一九七八)は、アイヌ民族が口承してきたカムイ・ユカラ(神謡)から何編かを選んで筆録し、珠玉の日本語訳とともに綴つた業績として名高い。一般に、アイヌの口承文芸としては「ユカラ」の用語が知られるが、これは「yukar」をカタカナ表記したもので、「ユカラ」と表記するのが正しく、今日では後者が広く用いられるよう

になつている。なお単に「ユカラ」と言つた場合、人間の英雄を主人公とする長編の物語（英雄詞曲・叙事詩）を指すが、「カムイ・ユカラ」は神々を主人公とするより短い物語で、しばしば教訓的な内容を含むなど、「ユカラ」とは異なる文学的ジャンルである。¹⁰⁾

わずか十九歳でその生涯を閉じた知里幸恵ののちも、多数のアイヌ口承文芸が採録され、筆記化・日本語訳されているが、そのような取り組みの最初のもの一つといえる『アイヌ神謡集』は、そのシンボル性だけでなく、内容的にも奥行きの高さと深さを備えており、アイヌの伝統的な世界観・精神文化への導きの糸口として、いまだ必携の一冊といえる。このことについては後段でも言及するが、ここではひとまず、知里幸恵の手になる日本語の序文について触れておきたい。

その昔この広い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました。天真爛漫な稚児の様に、美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活していた彼等は、真に自然の寵児、なんという幸福な人だちであつたでしょう。

の書き出しで知られる『アイヌ神謡集』の序文は、さわめて美しいことばでアイヌの伝統的な暮らしを語るだけでなく、時代の急激な変化に直面したアイヌ民族の当惑、苦しみ、やがてその困難を乗り

越える同朋が出現することへの祈りが込められた、絶唱ともいえる名文である。

しかしながら、これに対して近年、歴史的な立場からは、文学的な価値からは距離を置いた、冷静な再検討が必要であるという問題提起が投げかけられている。例えば中村和之は、

知里幸恵の『アイヌ神謡集』は、彼女自身がアイヌ民族出身の女性であつたこと、文学作品としてもすぐれた訳であつたこと、その後のアイヌ語表記の規範となつたこと、そして感動的な序文を収めていることなどによつて、アイヌに対するイメージを形作る上で決定的ともいえる影響力をもつた。（中略）結果として「自然と共生するアイヌ像」の形成につながつた。

と述べ、『アイヌ神謡集』の基調となつているアイヌ史像には、当時の時代思潮（「進歩史観」にもとづく「未開」「素朴」なものとしてのアイヌ史イメージ）が色濃く影を落としており、それ自体は実証的裏づけを持つものではなかつたと指摘している。¹¹⁾

ここで中村が指摘する「自然と共生するアイヌ像」は、今日も一般に広く流布する典型的なアイヌ民族へのイメージであると言つてよいだろう。ところが、こうしたイメージに対して、近年の歴史研究では、むしろ北方の海域世界を舞台として、あたかも「国際商

人」的な縦横無尽の活躍をする、「交易民」としてのアイヌの姿が脚光を浴びている。このような狩猟採集民の実態の評価に関する問い直しは、現在、広く世界的に議論されている論点であり、アイヌに関する同様の視角の登場も、世界的な潮流と軌を一にしている側面が指摘できる。

四 交易論

アイヌの歴史的な性格において交易を重視する見解は、意外に早くからみることができるといえる。例えば、北海道史に関する通説的な時代区分においては、擦文式土器の製作の終わる十三世紀前後からを「アイヌ文化期」としているが、「擦文文化期」から「アイヌ文化期」への転換の要因として、従来から本州方面との流通経済の進展による鉄鍋などの流入が重視されてきた。¹²⁾

二十一世紀初頭において、アイヌの交易論を第一線で牽引するのは瀬川拓郎の一連の著作である。瀬川は精力的な執筆活動により多数の著作を世に問い続けているが、ここでは、最初の著作である瀬川拓郎『アイヌ・エコシステムの考古学——異文化交流と自然利用からみたアイヌ社会成立史』（北海道出版企画センター、二〇〇五）を取り上げたい。

「アイヌ・エコシステム」とは、渡辺仁による用語である。渡辺は、アイヌと自然環境とのかわりをつぶさに検討して、それを経済的、社会的、宗教的の三側面に区分し、それらの有機的結合としてアイヌ文化の総体をとらえようとした。¹³⁾ 渡辺の「アイヌ・エコシステム」論には、狩猟採集民の生態の普遍的モデル構築という真の目的があったことが指摘されており、その本質は非歴史的・静態的な作業仮説であったといえる。これに対して瀬川は、「アイヌ・エコシステム」論を歴史的・動態的に再編成して、この概念に新たな息を吹き込んだ。

瀬川によれば、北海道の旭川・上川地方では、十世紀（擦文中期）を境として、対外交易のための集約的なサケ漁への特化を特徴とする、新たな自然環境への適応形態が成立する。これ以前と以後とは、集落立地や生業形態も大きく変化しており、前者の、より自然環境そのものに依拠していた状態を「縄文エコシステム」と呼び、後者におけるアイヌと自然環境との関係のありかたを「アイヌ・エコシステム」と呼ぶべきだとする。このように、瀬川の主張する「アイヌ・エコシステム」は、対外交易を強く意識し、商品生産のための特定の生産活動に偏った、いささか「いびつ」な自然環境への適応形態であるとされる。

北海道の時代区分において、画期としての十世紀を重視する点も瀬川説の特徴である。瀬川は、十世紀こそアイヌ史の本質的な転換

の時期であり、通説的に「アイヌ文化」への転換期とされる十三世紀は、十世紀に生じた変容の「量的な拡大」の時期であるとしている。¹⁴

対外交易・商品生産に傾斜した、前近代のアイヌによる特定の資源の大量確保という視点は、シカについても指摘されている。瀬川や佐藤孝雄の注目する十勝地方の陸別町ユクエピラチャシ（十五〜十七世紀）では、一団体にも及ぶとみられる膨大なシカ遺存体を出土し、しかも四歳以下と推定される若い個体が多いことから、シカに対する「乱獲」の可能性すら示唆されている。¹⁵ この指摘は、必然的に、アイヌの活動と自然界との関わりについて、重大な問題を提起することになる。

以上を要するに、従来、アイヌ民族については、「自然と共生」する人々という「環境保護者」的イメージが広く流布している一方で、近年、世界システムのな流通経済に密接不可分に関わり、交易のためには自然界からの「収奪」もいとわれない「交易民」的、あるいは「国際商人」的イメージが強調されるようにもなっている。これら二つの立場のへだたりは大きく、一見すると架橋不可能のようにもみえる。

ここで注目すべきは、アイヌの物語が伝える民俗知の価値観である。例えば、『アイヌ神謡集』所収の「梟の神が自ら歌った謡」（コシクワ）では、人間たちがシカやサケの不猟・不漁で苦しんでいる

ので、人間を守護する梟の神（カムイ）が、川ガラスを使者として神の国に談判に遣わしたという伝承を伝えている。それによれば、アイヌがシカの毛皮やサケを貪欲に求め、粗雑に扱ったがゆえに、シカやサケの神（これらの生物を司る「主」にあたるカムイ）が怒ってシカやサケを出さなくなった。しかし今後、丁寧な扱おうということであれば、シカもサケも出すであろう、というのである。

こうした物語だけでなく、商業交易に適応したシカ猟やその皮革加工の展開に対して、アイヌがシカに対する乱獲や粗略な扱いを忌避する行動をとったことは、幕末のトカチ地方の歴史史料などから事例を確認することができる。¹⁶

ところで、瀬川の前掲書の「あとがき」には、こうした問題に関連する瀬川自身のいわば「反省」が記されており、注目される。

私はひよつとすると、アイヌのサケ漁が商業的な性格を帯びていったという観察事実から、アイヌが酷薄な商業漁業者に変容していったイメージを描いていたのではないか。アイヌにとつてサケは富を生み出すものにはかならなかった。それは事実だ。しかし外在する商品ではなく、かれらと一体の生命と認識されていたにちがいない。

瀬川のアイヌ論は、「交易民」としてのアイヌ像を鮮明に打ち出

すことで、「平和で変化しない、自然と共生する人々」というステレオタイプを打ち破るのに大きな功績があった。しかし、その点を特筆するだけでは、瀬川の問題提起の一部しかみていないといえよう。

古代・中世以後、日本の支配層による北方産物への飽くなき欲望を主たる背景として、対外交易・経済交流の波にさらされたアイヌ社会においては、ときには強力な狩猟圧によって、生態系を圧迫するような状況すら生じたことは、一面の事実であろう。しかしながら、外部社会との交易に伴う商品生産の拡大と、自然環境への圧迫という事態を、アイヌは何のためらいもなく受け入れたわけではなかった。商品経済との対峙は、アイヌにとって、自然界ないし諸霊・諸神（カムイ）との関わりにおいて、しばしば深刻な矛盾と葛藤をもたらす危険性ははらんでいた。前近代アイヌ史にそうした矛盾・葛藤をみとることの意味は、決して小さくない。

さらに留意したいのは、アイヌの宗教観や世界観の内容に、対外交易の論理が埋め込まれているという指摘である。例えば中川裕は、「アイヌの伝統的世界観における人間と動物（本体としてのカムイ）との関係には、アイヌが和人や大陸の諸民族と繰り広げた交易の関係が投影されている」という趣旨を述べている¹⁷。要するに、今日知られる伝統的なアイヌの自然観やカムイ観を、単純素朴に「自然界からの恵みに依拠する文化」として理解すべきではない。むしろそ

れは、「対外交易を前提とする狩猟採集文化」というべきであろう。そしてそのことは、物質文化や社会・経済だけでなく、精神文化にも色濃く反映しているのである。

したがって、アイヌの精神文化を、狩猟採集民の心性として一般化したり、先史時代の縄文人の精神文化と同一視したりすることは、重大な問題があると思われる。アイヌの伝統的な精神文化・カムイ観は、縄文的な精神文化を基層の一部として保持しつつも、「商品経済」「対外交易」との対峙を通して、それらの論理を内在的に組み込み、縄文的な精神文化をアップデートするなかで形成されたものというべきではなからうか。

それでは、縄文的論理からアイヌ的論理への跳躍はいつ生じたのか。ここで仮説的な私見を示せば、北海道社会においては、続縄文後半期（三〜七世紀頃）に鉄器の流入が本格化して以後、倭・日本社会など「外部」との対外交易への参入が不可避・決定的になったことに注目される。このことを契機に、北海道・北方世界の人々は「商品」の論理との直面を強いられるようになる。これ以降、およそ千年以上もの期間、アイヌは「商品経済」に直面し、深く関与しつつも、人間と環境・自然（その本体は仮装したカムイ）神々の活動との「対称性」「循環性」を根本原理とする世界の岸辺に踏みとどまろうとし続けた。ここでは、交易品生産は、深い畏敬や感謝、丁寧な儀礼と常に密接不可分な行為であった。

そのような意味で、今日われわれの知ることのできるアイヌの伝統的な精神文化の源流は、三世紀前後に起源を認めることができるのではないか。それは、「アイヌ史における古代（アイヌ史的古代）」の開幕と言い換えることが可能であろう。¹⁸⁾

「アイヌ史における古代」という概念は、従来の研究において、全く一般的なものではないが、先行研究にいくつか類似する考え方を見出すこともできる。榎森進『アイヌ民族の歴史』（草風館、二〇〇七）は、北方史・アイヌ史研究の泰斗による本格的なアイヌ民族の「通史」として意義が大きい。榎森は、直接には近世史を専門分野とする研究者であるが、ここでは、①「古代アイヌ」に関する考え方、②近現代史研究の厚み、の二点に注目しておきたい。

①に関しては、とくに、第一章として「古代社会とアイヌ民族」が立てられ、「アイヌ民族の歴史における古代」を取り扱う方針が打ち出されている点が留意される。文中でも、「擦文文化を担った人々（アイヌ）」とか、「擦文文化期のアイヌ」というような表現が多用され、擦文文化期が「アイヌ史」の一段階であるという姿勢が明瞭に示されている。

また、②については、本来、前近代史を専門とする著者によって、この大著のほぼ半分にあたる紙数が近現代史の記述に割かれており、圧巻である。同化政策や差別の実態、アイヌ民族による主体的な運動の軌跡などが、具体的な史料にもとづいてたんねんに跡づけられ

ている。

五 アイヌが経験した近代

ところで、これまで述べてきたようなアイヌの民族知（民俗知）は、過去の忘れられた存在ではない。アイヌの伝統的な精神文化が、現在も生活の端々に生きていることは、筆者の乏しい経験においても、しばしば目にし、実感しているところである。砂沢クラ『ク ス クップ オルシベ 私の一代の話』（北海道新聞社、一九八三…アイヌ民族文化伝承会らぶらん、二〇一二（私家版））からは、そうした「先祖から」の精神世界が、近現代日本におけるアイヌ民族の暮らしにおいても決して失われておらず、脈々と息づいていたことを読み取ることができる。

本書にはいくつかのヴァリエーションがあるが、一般に広く知られるのは、約三十五年前、著者クラによる二冊のノート原稿をもとに、北海道新聞紙上に連載された記事をまとめ、一九八三年、北海道新聞社から刊行された版である。その後も、一九九〇年には福武書店から文庫化されるなど、いくどか復刻され、多くの読者を得ている。

世間と周囲の人々を見つめる温かく謙虚な視線、飾らない素朴な

語り口を通して、厳しい生活、多くの困難、そうしたなかにも散りばめられた幸せなエピソードの数々が記される。夫による家庭内の暴力も率直に語られる。これをその家庭・その個人の問題に矮小化することができないことは、一読すれば容易に察せられる。それは、日常の隅々にまで浸透する近代日本に追い詰められた、先住民族による苦悩の発露というほかない。

さらに本書では、クラが子ども頃から慣れ親しみ、成長してからも身近にあつた伝統的なアイヌ文化の世界が、生活の実感をともなつて生き生きと描かれる。近現代の北海道を、アイヌ民族としてまた一人の女性として生きぬいたクラの姿は、苦難に満ちてはいるが、力強く、誇り高いものとして、読み手の心を打つ。

アイヌや北方諸民族にとつて、近代国家への編入がいかに深刻な意味を有したか。¹⁹⁾この問題に関する理論的な考察として、テッサ・モリス＝鈴木『辺境から眺める——アイヌが経験する近代』（みずす書房、二〇〇〇）が数々の重要な指摘を行っている。その後も、アイヌや北方先住民をめぐるつては、いまなおポスト植民地的状況が根深く残存し、終止符を打てず宙吊りにされたいくつもの課題が、われわれの眼前に突きつけられている。²⁰⁾本書の刊行からまもなく二十年が経とうとしているが、そこで提起された諸問題は、いまだ過去のものとはなっていない。

注

- (1) 大林太良「北方文化と日本文化」『北方文化と日本列島』（クバプロ、一九九六）。
- (2) 北方遊牧民系の文化が倭・日本の信仰世界に大きな影響を与えたという見通しは最近の小林青樹『倭人の祭祀考古学』（新泉社、二〇一七）などにも示されている。
- (3) 菊池には、菊池俊彦『北東アジア古代文化の研究』（北海道大学図書刊行会、一九九五）、同『環オホーツク海古代文化の研究』（北海道大学大学院文学研究科、二〇〇四）の二冊の研究論文集がある。
- (4) 蓑島栄紀『「もの」と交易の古代北方史——奈良・平安日本と北海道・アイヌ』（勉誠出版、二〇一五）、田中史生「越境する古代」『歴史評論』七九九（二〇一六）。
- (5) 福田正宏『極東ロシアの先史文化と北海道』（北海道出版企画センター、二〇〇七）、北海道考古学会編『二〇一五年北海道考古学会大会「サハリン・千島ルート再考」資料集』（二〇一五）など参照。
- (6) 瀬川拓郎『アイヌと縄文——もうひとつの日本の歴史』（ちくま新書、二〇一六）。
- (7) 例えば、種石悠「総説…先史時代の北海道に及んだ、北からの文化の波」『北からの文化の波——北海道の旧石器からオホーツク文化まで』（北海道立北方民族博物館第31回特別展図録）（北海道立北方民族博物館、二〇一六）など参照。
- (8) 知里真志保「アイヌ文学の形態とその史的背景」『アイヌ文学』（民族教養新書、一九五五）。
- (9) なお大林自身は、ユカラを構成する諸要素の源流については、ユーラシア・シベリア諸民族の叙事詩からの影響とともに、中近世日本文学による影響を考慮に入れなければならないとしている。
- (10) アイヌの口承文芸のジャンルの名称には地域差があり、「ユカラ」がすべ

ての地域で英雄詞曲を意味するわけではない。例えば道東では英雄詞曲を「サコロベ」と呼び、樺太では「ハウキ」と呼ぶ。

- (11) 中村和之「教科書のなかのアイヌ史像——知里幸恵『アイヌ神謡集』をめぐって」北海道・東北史研究会編『場所請負制とアイヌ——近世蝦夷地史の構築をめざして』（北海道出版企画センター、一九九八）。

- (12) 宇田川洋『アイヌ文化成立史』（北海道出版企画センター、一九八八）など。

- (13) Hiroshi Watanabe, *The Ainu Ecosystem: Environment and Group Structure*, Seattle: University of Washington Press, 1973. 渡辺仁「アイヌの生態系」『人類学講座12 生態』（雄山閣、一九七七）。

- (14) 瀬川拓郎「中世アイヌ社会とエスニシテイの形成」東北芸術工科大学東北文化研究センター編『北から生まれた中世日本』（高志書院、二〇一三）。

- (15) 佐藤孝雄「中近世アイヌのシカ送り儀礼」『動物考古学』三〇（二〇一三）。

- (16) 秋野茂樹「シカの霊送り儀礼 再考」『帯広百年記念館紀要』二六（二〇〇六）、養島前掲書（注4）など。

- (17) 中川裕『語り合うことばの力——カムイたちと生きる世界』（岩波書店、二〇一〇）参照。これと類似する指摘は、坂田美奈子『アイヌ口承文学の認識論』（御茶の水書房、二〇一〇）や、北原次郎太『アイヌの祭具——イナウの研究』（北海道大学出版会、二〇一四）などの研究のなかにもみられる。

- (18) 養島栄紀「古代北海道地域論」『岩波講座日本歴史20 地域論』（岩波書店、二〇一四）、同前掲書（注4）など。

- (19) 近代日本のアイヌ政策に関する実証的な歴史研究の業績として、小川正人『近代アイヌ教育制度史研究』（北海道大学出版会、一九九七）、山田伸一『近代北海道とアイヌ民族——狩猟規制と土地問題』（北海道大学出版会、二〇一〇）などが重要である。

- (20) アイヌや北方先住民の現在をめぐる、ポストコロニアリズムの視座から

の著作として、最近も植木哲也『植民学の記憶——アイヌ差別と学問の責任』（緑風出版、二〇一五）、同『新版 学問の暴力——アイヌ墓地はなぜあばかれたか』（春風社、二〇一七）、石純姫^{イサハ}『朝鮮人とアイヌ民族の歴史的つながり——帝国の先住民・植民地支配の重層性』（寿郎社、二〇一七）などがある。